

## 2列王記 1 4章 8-10節 「災いの招来」

### アウトライン

#### 1 A 自信過剰の戦い

1 B 霊の勝利の後の惑わし

2 B 無敵感

3 B キリストのみにある力

#### 2 A 自分を傷つける弄り

1 B 「私は大丈夫」という罠

2 B 敗北

1 C 防御機制の減退

2 C 霊的財産の喪失

#### 3 A 福音の始まり

### 本文

列王記第二 14 章を開いてください。私たちは聖書通読の学びをしていますが、午後に 14 章から 16 章までを学びたいと思います。今朝は 14 章 8-10 節に注目したいと思います。

8 そのとき、アマツヤは、エフーの子エホアハズの子、イスラエルの王ヨアシュに、使者を送って言った。「さあ、勝敗を決めようではないか。」9 すると、イスラエルの王ヨアシュは、ユダの王アマツヤに使者を送って言った。「レバノンのあざみが、レバノンの杉に使者を送って、『あなたの娘を私の息子の嫁に出来ないか。』とやったが、レバノンの野の獣が通り過ぎて、そのあざみを踏みじった。10 あなたは、エドムを打ちに打って、それであなたの心は高ぶっている。誇ってもよいが、自分の家にとどまっていなさい。なぜ、争いをしかけてわざわざいを求め、あなたもユダも共に倒れようとするのか。」

私たちの学びは、預言者エリシャの生涯をちょうど読み終えたところです。南ユダでは、赤ん坊の時に神の宮の中に匿われて育ったヨアシュが王となりました。そして、北イスラエルでは同名の王ですがヨアシュがおり、彼がエリシャの最期を見届けた人物です。ユダの王ヨアシュの子がアマツヤであり、アマツヤの生涯が列王記第二 14 章の前半部分に書き記されています。

#### 1 A 自信過剰の戦い

アマツヤは、善い王としての評価を受けています。けれども、ユダ国の他の善い王と同じように、生涯、主に聞きしたがって来たのですが、最後に高ぶって罪を犯してしまうという終わりを遂げています。アマツヤは、エドムと戦いました。なんと一万人の兵を殺しています。大勝利です。そこで彼は自信過剰になりました。

北イスラエルと戦って、再統一を図ろうと考えたのです。元々は父祖ダビデが治めていた王国の北半分なので、今こそ、一つになってイスラエル大帝国を復興させようと野心を抱いたのです。

けれども北イスラエルのヨアシは、賢明な助言をしています。おそらくヨアシのほうがずっと年上で、前回学びましたように、シリア（アラム）のハザエルまたその子ベン・ハダデとの戦いで、痛い目にあっており、またエリシャからの預言の言葉によって三回の戦いで勝利を収めています。こうした経験を持っていたので、「エドムに買ってお前は高ぶっている。誇るのはいが、自分の中だけにしろ。ただ災いを自分の身に招くだけだ。」と忠告しました。けれども北イスラエルの王ヨアシは、ユダから見れば、そして実際もそうですが背教者です。ヤロブアムの、罪、金の子牛を拜む罪を犯しています。ですから、アマツヤは、「あいつは背教者だ」という見下しがあってもおかしくありませんでした。そこで愚かにもこの助言を退けました。

### 1 B 霊の勝利の後の惑わし

聖書の中では、常に、大きな霊的体験や勝利の後には必ず激しい闘いがあることを教えています。ヨシヤが約束の地に入った時にエリコを陥落させましたが、次の町アイに対しては、小さな部隊で大丈夫だと慢心しました。心の中の油断、神の御霊によって動かなければいけないのに、あたかも肉によって打ち勝ったのだと勘違いして、それで主に拠り頼むのを忘れてしまうのです。

そして悪魔は、霊的な高揚の後に何とかして肉に従って生きようしようと私たちに仕向けてきます。イエス様ご自身の二つの霊的体験がそうでした。どちらも、父なる神が「これがわたしの愛する子」とご自分のことを父によって認証を受けた後のことです。一つは水のバプテスマを受けられた後、御霊が天から鳩のように降り、御父から声を受けましたが、その直後にイエス様は御霊によって荒野に導かれ、そこで四十日断食をされた後に悪魔が彼を誘惑しました。もう一つは高い山で変貌されたことです。父のふところにいたあの栄光をもって体も変わり、預言者モーセとエリヤもそこにいて、そして父がイエスをご自分の子として任じられた後に、山のふもとに降りると悪霊につかれている子がいいて、弟子たちが追い出せなかったという場面に出くわします。霊的な勝利を収めた後に、悪魔は激しく攻撃します。

### 2 B 「正しすぎる」という過ち

ところで、アマツヤが陥った肉の思いは高慢、高ぶりですが、それは「私が正しい」という自己義認によるものであります。それは先に説明したように、主に従い通して、エドムにも打ち勝つことができ、そしてイスラエルの再統一のために、背教者であるヨアシと戦うのだという正義感です。

私たちは正しく生きなければいけません。罪の生活をやめて、正しく生きなければいけないのですが、使徒パウロはこう言いました。「目をさまして、正しい生活を送り、罪をやめなさい。神についての正しい知識を持っていない人たちがいます。（1コリント 15:33）」けれども、興味深いことに知恵者ソロモンは、晩年に伝道者の書を書き記し、このようにも言っています。「あなたは正しすぎてはならない。知恵がありすぎてはならない。なぜあなたは自分を滅ぼそうとするのか。（7:16）」これは、いったいどういうことか？私たちが正しいと思っていることが、本当に神の前にひれ伏して、へりくだった中で、主を恐れるからこそ抱いている正し

さなのか、それとも神の名は使っているけれども、いつの間にか自分の正しさになってしまっているのではないか、それを試して確かめる必要がある、ということです。ヤコブ書に、「人の怒りは、神の義を実現するものではありません。(1:20)」とあります。神の義がいつの間にか人の義に変わっていることがあります。

私たちは、他者を責めている時に気を付けなければいけません。その言っている内容がどんなに正しくても、神の義ではなく自分の義になっていることが殆どです。自分がこうされているという被害意識も、自分を騙します。「あの人にこんなにことを言われた、された。」と言って自分は被害を受けているように見えても、実はその態度によって周りの人を攻撃していることが殆どです。そして、良かれと思って自分で率先して行っているときも気を付けてください。周囲からやめたほうがよいのではないかという助言を受けているのに、聞く余地もなく自分の正しさを追求するときは要注意です。

### 3 B 無敵感

そしてアマツヤは、自分の正義だけでなく、自分の力にも過信していました。エドムでこれだけの大勝利を収めたのだから、北イスラエルと戦っても勝つことができるだろう、と思います。自分が主にあって戦っているのか確かめもせずに、自分のやりたいことをただ行っているのです。勝利の中で高揚して、自分は無敵と誤ってしまっています。

私たちはどうしても、自分の力を過信します。自分には本当はこれだけしかできないのに、それ以上できると思っています。そして、ある程度物事がうまくいくと、次もうまくいくと思って挑戦するのです。子供は面白いですが、いろいろなことを考えます。私は小学校と中学校の時は学校の成績が良かったのですが、小学生の時は勉強をしていなくてもテストの点数は良かったです。高学年の時に、「なぜこれ以上学ぶ必要があるのか。これで世の中のことを知りえたのに。」なんて思ったことが、あります。今になってみると恥ずかしいというか、子供の世界の特殊性を思います。

けれども、私たちは大人になっても同じことをしてしまっています。政治の世界を見ていると、スポーツ選手が国会議員になってみたり、あるいは地方自治体の首長が国政にとやかく言ってみたりと、自分に与えられている力がそんなところまで及んでいると思っているのかと疑問になることがあります。けれども、霊的にも同じなのです。主は私たちを豊かに祝福してくださっています。救われて、自分は神の子供になりました。ですから喜びでいっぱいです。そして、周りにいるクリスチャンの姿を見ます。その人たちがしていることは、何十年も信仰の試みを受けて、心砕かれて、それでやっていることが多いのに、それを自分も行おうとするのです。それは一見、簡単なようにみえるのです。世間一般でも同じことをしているので、それを行えばよいのだと思うのです。そこで、神の武具を身に着けないままで戦うので、悪魔の攻撃を受けてしまうのです。

### 4 B キリストのみにある力

日本語に、「自信」という言葉があります。これには良い意味と悪い意味があります。良い意味では、「神に愛されている」という安心感から来る深い確信です。愛されているからこそ、主の前に大胆に近づくことができます。「愛する者たち。もし自分の心に責められなければ、大胆に神の御前に出ることができ、また求

めるものは何でも神からいただくことができます。なぜなら、私たちが神の命令を守り、神に喜ばれることを行なっているからです。(1ヨハネ 3:21-22) 」

けれども悪い意味の「自信」があります。「自分にはできる」という確信です。世の哲学は、これを養い育てるべく働きかけます。成功哲学であるとか、経営セミナー、あらゆる自己啓発的な書物はこれに当てはまります。私たちは、自分に対する意識が否定的なので、いつの間にかそれらのものを受け入れて、自分を肯定的に見ていこうとする努力をしています。

しかし私たちは聖書的な人間観を抱く必要があります。今朝読んだ詩篇の箇所にも、こうあります。「父がその子をあわれむように、主は、ご自分を恐れる者をあわれまれる。主は、私たちの成り立ちを知り、私たちがちりにすぎないことを心に留めておられる。(103:13-14) 」私たちは塵に過ぎない存在です。塵に過ぎないので、主が私たちを憐れんでくださり、多くの恵みの御業を見せてくださっています。

私たちは、いつもこれを経験しなければいけません。パウロの告白した、「私は弱い時に、強いのです。」という言葉です。コリント第二 12 章 7-10 節を読みます。「また、その啓示があまりにもすばらしいからです。そのために私は、高ぶることのないようにと、肉体に一つのとげを与えられました。それは私が高ぶることのないように、私を打つための、サタンのものでした。このことについては、これを私から去らせてくださるようにと、三度も主に願いました。しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。」私たちがどうしても、これだけは取り去ってほしいと願うことがあります。けれども、取り去られないのは主の御心であり、そこで主の恵みと力を完全に知ることができるからです。

こうした弱さを知っている者こそが、パウロと同じように大胆に告白することができるのです。「私は、私を強くくださる方によって、どんなことでもできるのです。(ピリピ 4:13) 」日本語で「**虎の威を借る狐**」という諺がありますね。それは悪い意味で使われます。事実、私たちはキリストが行ってくださっているのに、あたかも自分が行っているように錯覚して、自分自身が虎だと思ったら間違いです。けれども、自分がキリストという虎がいて、そしてこの方によって強くされているのだという思いがあれば、私たちは大胆になることができるのです。ガキ大将と仲が良くなると、自分が守られましたね。同じように、キリストと親しい関係を持っていれば、自分が守られます。

## **2 A 自分を傷つける弄り**

そして、ヨアシュがアマツヤに言った言葉に注目してください。「なぜ、争いをしかけてわざわざいを求め、あなたもユダも共に倒れようとするのか。」ここの「争いをしかけてわざわざいを求め」という言葉に注目したいと思います。英語の訳では、「meddle to thy hurt (KJV)」、また「meddle with trouble(NKJV)」となっています。この meddle という言葉は、「余計な世話を焼く」「干渉する」「弄り回す」というような意味があります。ヨアシ

ユの治める北イスラエルに手を出して、自ら災いを招くようなことはするな、という意味です。箴言に、「人は火をふとこにかき込んで、その着物が焼け不いだろうか。(6:27)」という言葉があります。私たちは、しばしば取えて、自分に火傷を負わせるようなことを行なってしまう。

### 1 B 「私は大丈夫」という罠

それは自分で「大丈夫だ」という思いがあるからです。自分とは関わりが一切ないはずの処へ、大丈夫だということに入っていきことがあります。入ってはいけない関係の中に入っていきます。

例えば、クリスチャンが不信者の人と恋愛していることです。この場合、殆どすべてがこのように返答します。「その人の周りにはクリスチャンが私しかないの。だから彼が救われるためには、私が一緒にいなければいけない。」いいえ、もし神がその人を救われたければ、自分ではなくてその相手と同性のクリスチャンに紹介して伝道してもらえばいいだけの話です。もし今それができなければ、自分が相手を変えるのではなく、すでに自分が相手によって世的になっている、キリストから離れるようになっていく、ということが言えます。あるいは、結婚したとしても、その結婚の本来の意味を味わうことなく生涯を過ごすことになるでしょう。なぜなら、キリストにあって初めて二人は一つにされるからです。

「心を尽くして主に拠り頼め。自分の悟りに頼るな。(箴言 3:5)」自分の悟り、あるいは理解では、自分は大丈夫だと思っても、主がそうではないと仰っているなら、その悪から離れなければなりません。「主を恐れることは悪を憎むことである。(8:13)」

### 2 B 敗北

関わってはならないところに手をかけると、大変な悲劇が待っています。アマツヤには完全な敗北が待っていました。ペテ・シエメシュで敗れると、王が捕えられました。そして、ヨアシユはエルサレムに行き、その城壁を取り壊しました。約 180 メートルの壁が壊れました。それから、神殿の宝物倉にある貴重なものをことごとく取られてしまいました。人質も取って行きました。

### 1 C 防御機制の減退

私たちは、罪や悪を弄ると、初めに起こることは「防御機制の減退」であります。エルサレムの城壁が崩されたので、ユダは敵の攻撃に対して非常に脆くなりました。同じように、罪を弄ると自分を霊的に守る力が減退して行きます。一度、罪を犯したときは、自分は何とひどいことを行なったのだろう、と言って嘆きます。ところが、二度目にそれを行くと、それほど罪意識を抱かなくなります。この時に、「自分はいつでも罪をやめることができているのですが、実は以前なら避けられたものが今は、防御機制が壊れてしまったので、その罪をやり続けることになってしまうのです。

### 2 C 霊的財産の喪失

もう一つは、財産の喪失です。アマツヤは神殿の宝と人質を取られて行きました。同じように、私たちが罪を弄りまわしていると同じように、自分に与えられた財産や遺産を奪い取られて行きます。その財産と

は金銭的なことだけでなく、むしろ自分の尊厳の話をしています。自分の評判、自分の家族、自分の友人、これまで培ってきた経歴、これらのものがなくなってしまう。

そしてもっとも惜しいことは、霊的財産です。罪を犯せば、救いの喜びが失われてしまうのです。他人の女に手を出した者の嘆きがあります。「そのとき、あなたは言おう。「ああ、私は訓戒を憎み、私の心は叱責を侮った。私は私の教師の声に聞き従わず、私を教える者に耳を傾けなかった。私は、集会、会衆のただ中で、ほとんど最悪の状態であった。」と。(箴言 5:12-14) 」会衆のただ中で殆ど最悪というのは、神の集まりにおいて自分が全く霊的な喜びを楽しめない、という意味です。神との交わりが途絶え、信者との交わりが途絶えます。教会に来て最悪の状態であり、かといって世の中に出ても自分の尊厳は失われているので悲惨な状態です。

### **3 A 福音の始まり**

しかし、ここからが福音の始まりです。イエス様は、「心の貧しい者は幸いである。悲しむ者は幸いである。」と言われました。そのような最悪の状態に陥っているからこそ、主はその御手を私たちに差し伸ばしてくださいました。主は、私たちと異なり、その聖い手を差し伸ばすことによって、ご自身が汚れるのではなく、相手を清めるのです。

福音書には、らい病人がいました。彼らは人が近づけば、「汚れている、汚れている！」と叫ばなければいけません。けれども主が近づかれました。そして、中風の者が担ぎ込まれました。「あなたの罪は赦されました」と主は宣言されました。彼の病が何らかの罪に関わりを持っていたようです。そして、盲目の者、長血を患う女、そして最悪と言えば死んでしまったというもあります。けれども死人を生き返らせました。主イエスはこれらの病や傷を負って十字架につけられ、そしてこれらのものを葬り去り、死者の中からよみがえられました。

主は生きておられます。今、まだ自分は大丈夫だと思っている方は、どうかこの警告を受け入れて、主を恐れてそこから手を引いてください。今、もう自分は駄目だと思っている方は、主の恵みと憐れみの御手の中に入り込んでください。